

ダカールラリー2012

日野レンジャー ●日野チームスガワラ

排気量10リットル未満クラス3連覇を達成!

連続参戦21回の経験を活かし2台揃って完走!



REPORT **ダカールラリー2012** 1/1-1/15
Mar del Plata-Copiapó-Lima

**日野レンジャーが排気量10リットル未満クラス3連覇を達成！
2台揃ってペルーのリマにゴールし、日野自動車は初参戦以来の
21回連続完走を果たす**

日野自動車はクロスカントリーラリーの世界最高峰イベント、ダカールラリー2012年大会のトラック部門に「日野チームスガワラ」を結成して参戦。新たに開発した新型レーシングトラック1台を含む日野レンジャー（輸出名:HINO 500 Series)の競技車2台を投入した。

1号車を駆るのは今大会で史上最多の30回連続出場記録を達成したベテラン菅原義正と杉浦博之、新型の2号車は菅原照仁と鈴木誠一という布陣で、全国の日野自動車販売会社から公募選抜されたメカニック中野直也(広島、メカニックリーダー)、稲葉勇哉(宮城)、仲田昌宏(東京)、前田聖治(愛知)の4名が現場でサポートを行う体制である。南米での開催4年目となる今大会は1月1日に大西洋岸に面したアルゼンチンのマル・

デル・プラタをスタートし、アンデス山脈を越えてチリへ入国。8日コピアポで休息日を迎えたあと、太平洋岸を北上してペルーに至り、15日に首都リマにゴールする全行程8,336km(うち競技区間4,120km)で行われた。ラリーがスタートすると大型車勢のライバルが大勢を占める中で2台は自らのペースを守りながらじわじわと順位を浮上。3日には2号車が排気量10リットル未満クラス首位に立ち、1号車がその後方から続く体制を築いた。ペルーステージ初日の12日には2号車が競技区間終了後に駆動系トラブルに見舞われて走行不能となるが、後方から追いついた1号車が整備の許されているニュートラルゾーン内で牽引して日野メカニックと合流。その場で交換作業を行って事なきを得るなど、2台の日野レンジャーは



チームワークの良さも活かしながら順調に歩みを進めていった。

そして最後の難関となったペルー西部の大砂丘で順位を高めた2台は2号車が総合9位/排気量10リットル未満クラス優勝、1号車も総合24位/クラス3位という好成績でリマに到着。日野自動車として91年の初参戦以来21回連続となる完走を2台揃って果たすとともに総合順位での上位入賞と排気量10リットル未満クラスでの3連覇を達成し、日野車の実力を改めて世界にアピールすることとなった。



日野レンジャー2号車は菅原照仁/鈴木誠一組が新型レーシングトラックの性能をいかに発揮させて快走。トラブルもチームワークで乗り切り、見事排気量10リットル未満クラスの3連覇達成を実現した



序盤には投石でフロントガラスを割られるトラブルにも見舞われたがクラス3位で元気に完走した菅原義正/杉浦博之組の1号車



ラリーを終えてリマ市内のゴールセレモニー会場で健闘を讃えあう日野チームスガワラのスタッフたち。チームの総合力が導いた結果だ

D R I V E R S P R O F I L E

大会最多の連続出場とともに
今大会で通算24回目の完走を果たした
堅実なベテラン

菅原 義正 Yoshimasa SUGAWARA
●1941年生まれ

多数の国内レース出場経験、サハラ砂漠横断などの冒険行を経て1983年(41歳)に初めてオートバイでダカールラリー(当時パリダカ)に参戦した。以来、四輪部門7回を経て1992年より日野レンジャーで参戦。トラック部門総合準優勝6回、排気量10リットル以下クラス優勝7回の実績を持ち「パリダカ史上最多連続完走20回」「パリダカ史上最多連続出場30回」の世界記録についてギネス・ワールド・レコード社の認定を受けている。日本レーシングマネジメント(株)取締役会長。



冷静果敢なレース運びでクラス3連覇と
総合順位での3年連続シングル
フィニッシュを達成

菅原 照仁 Teruhito SUGAWARA
●1972年生まれ

1998年のダカールラリーにメカニックとして初参戦し、翌年からは父・義正のナビゲーターを担当。同時に国内オフロードレースやラリーレイド・モンゴルなどで経験を重ね、2003年のファラオラリー(エジプト)では日野レンジャーを駆ってトラック部門総合優勝を飾った。ダカールラリー2005年大会からは親子二代の日野レンジャー2台体制で参戦し、2007年には排気量10リットル以下クラスで初優勝。12年大会で同クラス3連覇を達成するなど成長著しい。日本レーシングマネジメント(株)代表取締役。



■2012ダカールラリー トラック部門 最終結果表

総合 順位	10リットル 未満 クラス	No.	ドライバー(国籍)	メーカー(国籍)	累計タイム	トップとの差
1		502	Gerardas DE ROOY(NLD)	IVECO(ITA)	45:20:47	—
2		505	Hans STACEY(NLD)	IVECO(ITA)	46:12:06	0:51:19
3		533	Artur ARDAVICHUS(KAZ)	KAMAZ(RUS)	47:08:32	1:47:45
4		509	Andrey KARGINOV(RUS)	KAMAZ(RUS)	50:21:57	5:01:10
5		523	Ilgizar MARDEEV(RUS)	KAMAZ(RUS)	50:22:37	5:01:50
6		511	Miki BIASION(ITA)	IVECO(ITA)	51:51:58	6:31:11
7		547	Martin KOLOMY(CZE)	TATRA(CZE)	52:15:02	6:54:15
8		513	Andre DE AZEVEDO(BRA)	TATRA(CZE)	53:06:54	7:46:07
9	1	508	Teruhito SUGAWARA(JPN)	HINO(JPN)	56:00:11	10:39:24
10		534	Pieter VERSLUIS(NLD)	MAN(DEU)	56:33:19	11:12:32
14	2	526	Johan ELFRINK(NLD)	MERCEDES(DEU)	60:53:04	15:32:17
24	3	521	Yoshimasa SUGAWARA(JPN)	HINO(JPN)	69:57:38	24:36:51
30	4	558	Robert SZUSTKOWSKI(POL)	MERCEDES(DEU)	79:13:13	32:52:26

国名略号: BRA=ブラジル、CZE=チェコ、DEU=ドイツ、ITA=イタリア、JPN=日本、KAZ=カザフスタン、NLD=オランダ、POL=ポーランド、RUS=ロシア

新型レーシングトラックがデビュー戦を飾る

日野とチームスガワラのノウハウを凝縮した意欲作



日野は、2012年大会に新型レーシングトラック1台を投入した。8年ぶりとなる新型車は日野レンジャーの4輪駆動車型市販モデルをベースとし、チームスガワラが培ってきたラリー車作りのノウハウを盛り込んだもの。排

動させた低重心のミッドシップレイアウトを採用したのをはじめ、フレームの組み幅を広げてねじれ剛性を向上。キャブは従来のフルキャブからショートキャブに変え、リアボディも根太構造(サブフレーム)を廃した上で軽

量な化学繊維製の幌を採用するなど車両全体で前大会参戦車両に比べ300kgに及ぶ軽量化を達成した。これに併せてブレーキバランスの見直しなどブレーキ性能の向上が図られたほか、アルミ製ラジエターの採用やインタークーラーのリアボディ前端上部への移設により南米で行われるダカールラリー特有の過酷な温度・負荷条件に耐える余裕ある冷却性能を持たせている。菅原照仁/鈴木誠一組の2号車として今大会に参戦した新型車は事前にラリーモンゴリアでテスト参戦を行ったこともあって大きな車両トラブルなく堅実かつ戦略的に競技を展開。見事大型勢のライバルに分け入る総合9位の高順位でゴールし、排気量10リットル未満クラスに於いても2位以下に大差をつけての優勝を果たした。なお、菅原義正/杉浦博之組の1号車も前回比約200kg以上の軽量化や冷却系の改良などによって戦闘力向上が図られている。

ゴール地のリマに駆けつけ、菅原照仁と握手をかわす日野自動車白井芳夫社長。日野の代表としてチームを祝福し、苦勞をねぎらった



作業の打ち合わせをする4人の日野メカニック。連日徹夜で整備を続け、大きなトラブルなしに2台の日野レンジャーをゴールに導いた



World Records 菅原義正が30回連続出場記録を達成

今大会でダカールラリー連続30回目の出場を果たした菅原義正は史上最多記録の達成として主催者ASOより表彰を受けた。1983年に2輪部門で初出場して以来2輪2回、4輪7回の参戦を経て92年から日野レンジャーでトラック部門に出場。同部門の総合準優勝6回、クラス優勝7回を獲得した。2009年大会までの完走率は100%を誇り、今回の30回連続出場はギネス・ワールド・レコード社の世界記録として認定されている。



■日野のダカールラリー戦歴 1991～2012

大会 年度	出場 回数	コース(国名) 成績(カミオン部門総合/排気量10リッター未満クラス)	総走行距離 (km)	出場車両
2012	21	マル・デル・プラタ(ARG)～コピアポ(CHL)～リマ(PER) 1号車:24位/3位、2号車:9位/ 優勝	8,836	日野レンジャー
2011	20	フェノスアイレス(ARG)～アフリカ(CHL)～フェノスアイレス(ARG) 1号車:13位(市販車クラス3位)/2位、2号車:9位(市販車クラス優勝)/ 優勝	9,458	日野レンジャー
2010	19	フェノスアイレス(ARG)～アントファガスタ(CHL)～フェノスアイレス(ARG) 1号車:規定により失格、2号車:7位(市販車クラス優勝)/ 優勝	9,026	日野レンジャー
2009	18	フェノスアイレス(ARG)～Vレバライソ(CHL)～フェノスアイレス(ARG) 14位・26位/2位・6位	9,579	日野レンジャー
2008	—	大会中止		
2007	17	リスボン(PRT)～ダカール(SEN) 9位・13位/ 優勝 (優勝車のみ表彰)	7,915	日野レンジャー
2006	16	リスボン(PRT)～ダカール(SEN) 5位・7位/ クラス別なし	9,043	日野レンジャー
2005	15	バレセロナ(ESP)～ダカール(SEN) 2位・6位/ 優勝 (優勝車のみ表彰)	8,956	日野レンジャー
2004	14	クレルモンフェラン(FRA)～ダカール(SEN) 5位/ クラス別なし	10,411	日野レンジャー
2003	13	マルセイユ(FRA)～シャルムエルシェイク(EGY) 5位/ クラス別なし	8,602	日野レンジャー
2002	12	アラス(FRA)～マドリッド(ESP)～ダカール(SEN) 3位/ 優勝 (クラス優勝7連覇)	9,440	日野レンジャー
2001	11	バリ(FRA)～ダカール(SEN) 2位/ 優勝	10,873	日野レンジャー
2000	10	ダカール(SEN)～カイロ(EGY) 5位/ 優勝	7,880	日野レンジャー
1999	9	グラナダ(ESP)～ダカール(SEN) 4位/ 優勝	9,441	日野レンジャー
1998	8	バリ(FRA)～グラナダ(ESP)～ダカール(SEN) 2位/ 優勝	10,570	日野レンジャー
1997	7	ダカール(SEN)～アガデス(NER)～ダカール(SEN) 優勝・2位・3位/ 優勝・2位・3位(トラック部門史上初制覇)	8,051	日野レンジャー
1996	6	グラナダ(ESP)～ダカール(SEN) 6位・11位/ 優勝・2位	7,579	日野レンジャー
1995	5	グラナダ(ESP)～ダカール(SEN) 2位/ クラス別なし	10,067	日野レンジャー
1994	4	バリ(FRA)～ダカール(SEN)～バリ(FRA) 2位/ クラス別なし	13,398	日野レンジャー
1993	3	バリ(FRA)～ダカール(SEN) 6位/ クラス別なし	8,877	日野レンジャー
1992	2	バリ(FRA)～シルト(LBY)～ケープタウン(ZAF) 4位・5位・6位・10位/ クラス別なし	13,015	日野レンジャー
1991	1	バリ(FRA)～トリポリ(LBY)～ダカール(SEN) 7位・10位・14位/ クラス別なし (日本のトラックメーカーとして初参戦)	9,186	日野レンジャー

国名略号: ARG=アルゼンチン、CHL=チリ、EGY=エジプト、ESP=スペイン、FRA=フランス、LBY=リビア、NER=ニジェール、PER=ペルー、PRT=ポルトガル、SEN=セネガル、ZAF=南アフリカ